杉作Ｊ太郎のマンコラム⑱

単刀直入にズバッと行こう。
センズリの話である。
行きたくねえなあ。う～む。その気持ちはわかる。センズリは話をするもんではなく、実際にするもんだからだ。でもそれじゃあ実際にすることってのは話をしちゃいけないのかっつーことになる。たとえば脱糞……って表現に品がないよ。すみません。なんて思ってもないくせに。でも原稿が大幅に遅れたことだけは本当にすみません……ってそれは別便で書けよ。もちろん別便にも書きますが。でもたとえば脱糞だが、これなんかもどっちかって言わなくてもすることだよね。でも脱糞の話っつーのは……あんまりしませんかね。失敗しました。でもまあなんにしてもしちゃあいけない話なんてのはやっぱりないわけでただ、それをこうして原稿に書くかどうかという話だよな、争点は。まあ今までさんざんっぱら書いといてなにを今更という気もしますのでこの問題はパス。俺はその手の話が好きなタイプの人間なんだよ。ただ、それをこうして白昼堂々……ってこの原稿を書いているのは早朝の６時半ですが、ともかく白昼堂々してもいいもんかという懸念は残る。なんだよ、俺はセンズリを人間の行為として差別してるのか？　太陽の下では語れないって言ってるのか？　いや、それはちょっとニュアンスが違うんですがね。それは太陽の下では映画を映写してもスクリーンに投影されないのと同じでね、センズリの話ってのも太陽の下では色褪せるんじゃないかということなのである……って詩人だなあ、今日の俺は。調子いいぞ。
というわけで、少々不安ではありますが、今回はセンズリ。それも旅先でのセンズリというテーマでこれから先の４ページ。マンコラムをお届けしてみようと思っとる次第です。

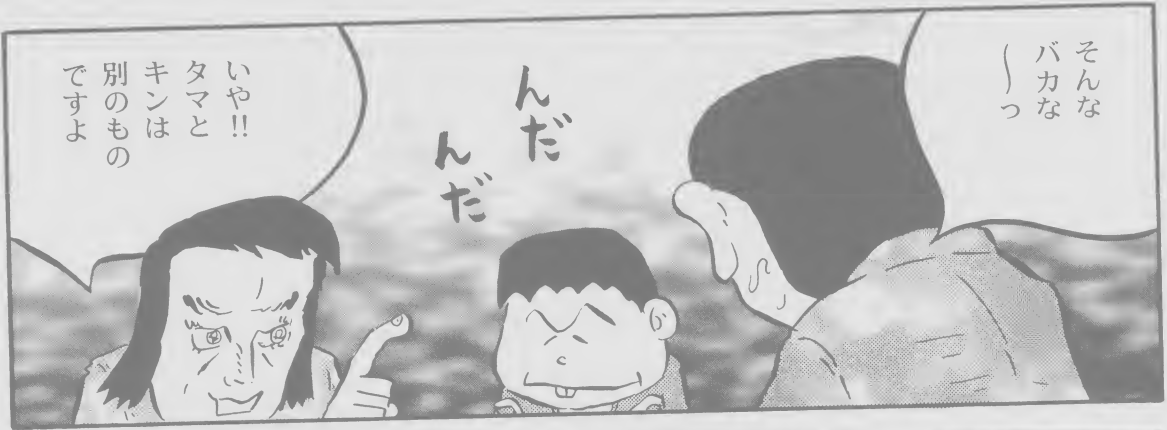
MAN COLUMN BY J.SUGISAKU. VOL.18

センズメンタル・ジャーニー

で、早速旅先でのセンズリについて記そうかと思ったのだが、ここで女性読者から質問があったと仮定して。女性の場合はセンズリではなくマンズリなんでしょうか、と。確かにそういう表現を用いる一部マスコミもありますが、俺はそれに異議を申し立てたい。マンズリのマンは女性の部所を指してのマンだと思いますが、じゃあ男性の部所はセンっていうのか？　俺は聞いたことないですね、センが大きいだの小さいだの黒いだの立ってるだなんて話は。センズリのセンは1000の千。数字の千だよな。だから女性もセンズリでいいんだと俺は理解しています。女性だけマンズリだなんておかしいよ。それなら男性はチンズリにしなくちゃいけないわけで。

なにをつまんねえことにこだわってるんだよということにもなりそうですが、これもセンズリが語られずに来すぎたことの弊害でしょうね。

そういえば、先日、某FMラジオにゲスト出演した際のこと。パーソナリティは名前をいえば女性なら「えっ、あのカッコいい人が！」っ垂唾モノの人気タレントの人なんですが、ここは慣例としてとりあえず名前を伏せましょう。で、そのナマ番組の放送中、とんでもない問題がもちあがったのであります。レコードをかけてる時だったのでオンエアはされてませんが。

タマキンって金玉とは違うでしょう
タマキンって金玉とキンのことでしょ？

まったく驚きましたよ、俺は。タマキンってのは金玉のアナグラムだと思ってましたから、今日までず〜っと。でも多数決で決める問題じゃないですが、もしも多数決だったらタマキンはタマとチンチンということになるわけで。少なくとも、レコード会社の某氏と人気タレントの某君はそうかもしれんと思っとるわけで。その時、俺はなんて馬鹿なことを言ってんだあ〜って思ったんですが、ひょっとしたら実はこれが正しくて、俺の考えが間違ってたのかもしれませんな。

　で、本当はもっと突っ込んだ話をしたかったんですが、レコードが終わっちゃったんでその話はそのまま立ち消えになってしまったのである。その後はまったく別の話題をツラツラと展開したわけですが、いや〜大人ですねえ。

　でも30いくつになってこんなチャイルデッシュな問題に頭を悩まさなきゃならないのもすべてはこうした問題を後送り（あるいは無視）してきたからでしょうから。こういうことは一度徹底的に論議したほうがいいんです。クラス単位でだっていいし、職場でだっていい。でも、そういうことになると必ずそんな下品な話題ができるかっていう人はいるもんです。ドアホ、そんなこと言ってる人のほうがよっぽど品のない顔しとるわい！

まあいいでしょう。よくないけど。

話は女性もセンズリなのかどうかという問題ですが……ってそれも話が横道に行ってるんだよ。旅先のセンズリ。この話をしようっていうことなんですよね。

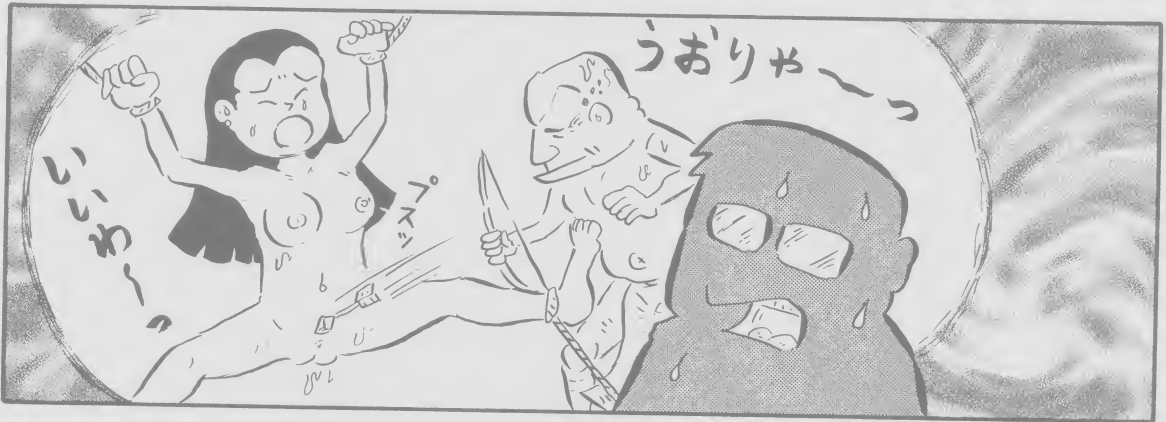
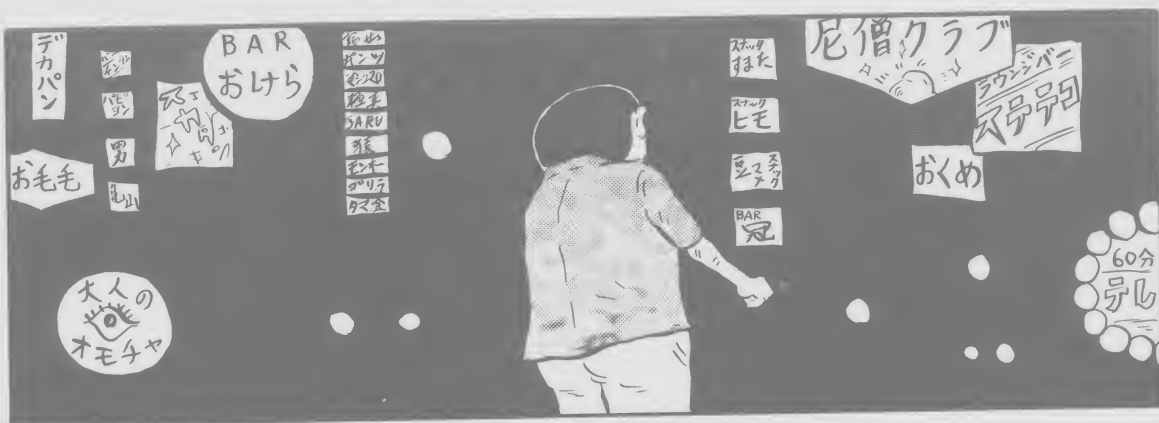
　了解しました。

　で、旅先の話なんだが、これがどうしたもんなんだろうか。俺は旅に出るとたまらなくセンズリがしたくなってしまうのである。よく旅先で心が洗われるような感じがする、なんてことを言いますが、俺の場合は心が洗われるついでにセンズリがしたくなってしまうのである。家でもやってんのに。家でやらしてないみたいじゃないか！　世間体を気にする母親とかなら言いそうな台詞だが……ってそれは言わん！　とにかく家でもやってるんだから別にたまってる（直接的な表現をすると照れますな）わけじゃないのに。なのになぜか旅に出るとセンズリがしたくなってしまうのだ。まあ旅とは言っても実際には仕事で1泊する程度の言うなれば出張ですが。でも俺の場合は遊び半分だから仕事と言ってもやっぱり感覚的には旅ですが……ってつまらんところで文章を止めるんじゃない！

　とにかく、したくなるわけですわ！

　それは欲求、というよりも禁断症状に近い感覚で。

で、それはなんでかな〜って考えてみたことが1度や2度じゃないんで実はおぼろげながら答えが出てるんですが、まず第一には旅先で不安になってる気持ちを落ち着かせるための行為なんじゃないかと思えるわけです。よく猫ちゃんとかがなんかしてて失敗した後とか、どっかに連れて行かれたときに一生懸命自分の毛を嘗めて落ち着こうとしますが、あれに似てるんじゃないかと思えるわけです。

で、第二に、ホテルや旅館に宿泊した際、寝床に入ってもなかなか寝付かれないわけです。で、それはなんでかっつーと、今、この瞬間に他の部屋ではヒイヒイ言ってる奴もいるんじゃないか、いや、この部屋で毎晩、あるいは最近、道々ならぬカップルが歓声と鳴咽をあげていたんじゃねえのかな〜とか思いはじめますとこれが目がギンギン冴えてきてしまうわけです。これは実際に旅先で俺がセンズリする際の呼び水として必ず浮上する思考ですんで俺の場合はこれがものすごく大きいと思いますな。

しかし、夜中になってから気が付いてももうそこにズリネタ（これまた直接的な表現をすると照れますな）はないわけで。ホテルの部屋を夜捜ししても出てくるのは聖書かその土地の案内ムックぐらいのもんですから。まあ、ズリネタなんかいらんわい、という人も多いでしょうし、実際俺もないならないで済ませられないこともないんだが、どうせやるからには自分にとってベストなかたちで臨みたい。そうなると俺の場合はどうしてもズリネタが必要になるわけでして、俺の場合はまあなんと申しましょうか、あの〜その〜つまり……エ……ロ……本があったほうが……それもグラフ誌の……って照れたふりすんな！

だから俺が旅先に着いたらまずなによ
り先にすることはエロ本を調達できそう
な書店を発見しておくことである。これ
がない場合は大変でして、その夜の予定
を大幅に変更して捜さなきゃならない羽
目になる。昨年暮れに高野拳磁選手のプ
ロレスを見るべく熊本へ行ったときがそ
うでした。で、めでたく店を発見した場
合。これが仕事で行ってる場合は集団行
動ですし、女性もいたりした場合にはな
かなか一緒にいるときは買えないですか
らね。別に恥ずかしいわけじゃないんで
すが、同行してる人間がエロ本買ったり
するのが愉快でない人もいますから。同
行してる誰かの旅情をぶちこわすような
無礼はしたくないですから。だからそう
いう場合はいったんホテルに帰って、お
やすみなさいをした後で、こっそりもう
一度街に出て、エロ本を調達してくるわ
けです。昨年暮れに雑誌の仕事で小樽へ
行ったときがそうでした。

しかし、宿泊地がものすごく奥深い場
所だったりした場合には現地で調達する
のは不可能である。そういう場合は家か
ら持って行くかというとこれはやっぱり
ムードが出ない。論外です。旅に家で読
んだエロ本は持っていきたくないです
ね。

で、そういうときはどうするかってい
うと、今はテレカという便利なものがあ
るんである。いろんな絵柄のテレカが出
回ってますからね。かわいいのからハー
ドなものまで。これがポケットにも入る
し、また持ってても誰にも気付かれない
から実にいいんです。エロ本とそんなに
変わらん？　いや。俺の中では完全に違
いますね。

さて。ここでひとつ、旅先でセンズリ
する場合、重大な問題が発生する場合が
あります。それは相部屋だった場合。ま
だよく知ってる人ならなんとかなるんで
すが、これがよく知らない人と一緒にな
った場合。それもその人がなかなか部屋
に帰ってこない場合。これが大問題なの
である。なんせ、いつ部屋に入ってくる
かわからないですからね。オチオチして
られないわけです。『ゲンセンカン主人』
の伊豆ロケのときがそうでした……って
そこまで書くか。そのとき、俺はスチー
ルの人と同室だったんですが、これが大
いに困りまして。エロ本は昼間、バスに
1時間乗って下田まで行って調達してま
したんでこれはなんとしてもやらねばな
らん！

で、どうしたかというとこれがグッド
アイデアですよ。丁度、風邪ひいて熱が
ありましたんで、部屋じゅうにティッシ
ュのクズを散乱させたんですな。つまり
いざというときには、そこへパパッと投
げればセンズリしたティッシュとは思わ
んだろうという寸法だったのであります。

完